

原本蒙古字韻の復元 一校正字様の湖北本誤をめぐって一

吉池孝一

1. はじめに

元代において蒙古字韻には幾つか異なるテキストがあったらしく、当時朱宗文はそれらを付き合わせて誤りと見なしたものを正し、更には所収字を増補し、一本を成した。この一本を「朱宗文本」(朱氏序 1308 年)と称する。現存する唯一の蒙古字韻のテキストである『倫敦抄本』(ロンドンの大英図書館所蔵。清代乾隆年間書写<sup>1</sup>)はこの「朱宗文本」の流れを汲むものである<sup>2</sup>。そして、「朱宗文本」の流れを汲む現存『倫敦抄本』の所収漢字は三つの層からなっている。第一層は『新刊韻略』から採られた部分、第二層は『新刊韻略』に未収録で義注も付されていない部分(ほぼ 86 字)、第三層は『増修校正押韻積疑』による増字・増注部分(108 字)である。

さて、朱宗文は蒙古字韻巻頭の“校正字様”において蒙古字韻の異本の一つである「湖北本」の誤の訂正をしており、その中で“驪”と“輜”の訂正に言及する。校訂で言及されるということは、この二字は、朱宗文が新たに増補したのものであれば朱宗文以降に増補されたものでもない。朱宗文以前に蒙古字韻に取り入れられていなければ、校訂において言及することはできない道理である。そして、これらの二字は『新刊韻略』に未収録で義注も付されていない第二層に属す。これより、第二層に属す“驪”と“輜”以外の諸字も(同質と見なしてよいならば)ほぼ同時期に蒙古字韻に取り込まれた、すなわち朱宗文以前に蒙古字韻に取り込まれたとすることができる。そうであるならば、次には、朱宗文以前のいずれの時期に取り込まれたかということが問題となるわけであるが、これは「原本蒙古字韻」の復元とかかわってくる。

以上小稿の内容を簡単に説明した。これより“湖北本誤”の校訂をめぐる幾つかの問題について検討した経緯をやや詳しく述べる。なお、パスパ文字は脚注の方式によってローマ字に翻字する<sup>3</sup>。

2. 湖北本誤

<sup>1</sup> 尾崎 1962 は欠筆に着目した研究により清の乾隆年間(1736-1795 年)に書写されたとする。吉池 2009a は、期間を最も狭くとるならば、乾隆 37 年前後から乾隆 42 年までの間となるとした。後者は状況証拠によるものであり確実とは言い難いが参考にはなる。

<sup>2</sup> 「朱宗文本」の後、元末に「朱宗文本」の欠落を「浙東本」で補った「補修本」が刊行された。その「補修本」の末裔が現存する『倫敦抄本』であるということについては吉池 2008b で述べた。

<sup>3</sup> 〈子音〉 $\text{ᠮ} g$   $\text{ᠮ} k'$   $\text{ᠮ} k$   $\text{ᠮ} ᠒$   $\text{ᠮ} d$   $\text{ᠮ} t'$   $\text{ᠮ} t$   $\text{ᠮ} n$   $\text{ᠮ} l$   $\text{ᠮ} b$   $\text{ᠮ} p'$   $\text{ᠮ} p$   $\text{ᠮ} m$   $\text{ᠮ} f$  (  $\text{ᠮ} f_1$  奉母  $\text{ᠮ} f_2$  非敷母。 $f_1, f_2$  の区別がない場合は  $f$  とする。1 は旧濁音、2 は清音。以下数字を用いるものは同様)  $\text{ᠮ} v$   $\text{ᠮ} j$   $\text{ᠮ} č'$   $\text{ᠮ} č$   $\text{ᠮ} ᠨ$   $\text{ᠮ} š$  (  $\text{ᠮ} š_1$  禪母  $\text{ᠮ} š_2$  審母)  $\text{ᠮ} ž$   $\text{ᠮ} j$   $\text{ᠮ} c'$   $\text{ᠮ} c$   $\text{ᠮ} s$   $\text{ᠮ} z$   $\text{ᠮ} h$  (  $\text{ᠮ} h_1$  匣母  $\text{ᠮ} h_2$  曉母)  $\text{ᠮ} \gamma$   $\text{ᠮ} y$  (  $\text{ᠮ} y_1$  喻母  $\text{ᠮ} y_2$  幺(影)母)  $\text{ᠮ} r$   $\text{ᠮ} q$  (半母音)  $\text{ᠮ} ü$   $\text{ᠮ} i$  (母音)  $\text{ᠮ} u$   $\text{ᠮ} i$   $\text{ᠮ} é$   $\text{ᠮ} e$   $\text{ᠮ} o$  とし、母音  $a$  は( )を付して補写する。

朱宗文はその校訂の内容により、自らの作業を4種の項目に分類し、「朱宗文本」の巻首に“校正字様”と題して収めた。まず、各本を通じた誤りの訂正（各本通誤字）、次いで各本に重複し誤って収められた字の削除（各本重入漢字）、更に「湖北本」と称される一本の誤りの訂正（湖北本誤）、「浙東本」と称される一本の誤りの訂正（浙東本誤）を収めた。これらのうち、各本通誤字と各本重入漢字についてはすでに検討した<sup>4</sup>。今回は“湖北本誤”を検討する。湖北本誤は、「湖北本」と呼ばれる一本の誤りの訂正についてのべた箇所であるから、各本がよった蒙古字韻すなわち「原本蒙古字韻」にあった誤りの訂正に言及したものではなく、「湖北本」にある特異な部分を『古今韻會舉要』により訂正したものにすぎない。しかしながら、この訂正の記述の中には「原本蒙古字韻」がどのような体裁であったかを垣間見ることのできる部分もある。下に『倫敦抄本』の湖北本誤を翻訳し日本語訳を付す。

#### 湖北本誤

bév	pév	驃从並
ñeu	zeu	汝从日
hlem	k'(a)m	輜从溪

- ・驃を bév とするのは湖北本の誤りであり、正しくは並母に従う pév。
- ・汝を ñeu とするのは湖北本の誤りであり、正しくは日母に従う zeu。
- ・輜を hlem とするのは湖北本の誤りであり、正しくは溪母に従う k'(a)m。

なお、三つ目の項目には誤写と思われる部分がある。hlem は h1i(a)m であるかもしれず、“輜”は“輜”とすべきである。この点を含めてこれより順次検討する。

### 3. 一つ目の校訂

驃を bév とするのは「湖北本」の誤りであり正しくは並母に従う pév である、ということについて。

訂正の対象となる本文を抜き出し、『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すと次のとおりである<sup>5</sup>。数字は『新刊韻略』での小韻すなわち同音の漢字を集めたグループ内の配列順であり、○を付した数字はその最終字であることを示す。×を付したものは『新刊韻略』に未収録の字である。適当なフォントがない場合{山票}のように示す。

1	2	3	4	5	⑥	1	2	3	④	1	2	③	①						
ア	bév	[平]	鑣	臙	儵	漣	蘓	蕪	標	杓	標	[上]	標	標	{山票}	表 <sup>6</sup>	(下十五 a の 5 行目)		
			2	蕭[宵]	甫嬌切				2	蕭[宵]	甫遙切			17	篠[小]	方小切	17	篠[小]	陂橋切

<sup>4</sup> 各本通誤字は吉池 2008a で、各本重入漢字は吉池 2009b, 2010 で検討した。

<sup>5</sup> 蒙古字韻所収字の供給源が『新刊韻略』であるということについては寧忌浮 1992 による。

<sup>6</sup> 『倫敦抄本』では標{山票}表の三字の部分に欠落がある。花登 1989(211 頁)は『古今韻會舉要』により復元した。

1 × ③                    1 ② 1 ②                    ×  
 イ pèv [平] 瓢 剽 漂    [上] 標 鰲 殍 莖    [去] 驃                    (下十五 a の 6 行目)  
 2 蕭[宵]符霄切 17 篠[小]符少切 17 篠[小]平表切

“驃”は『古今韻會舉要』に“驃毗召切 宮濁音”とあり並母であることがわかる。したがって、パスパ文字としては幫母の𐰃 b ではなく、並母の𐰃 p でなければならない。そこで、アの bèv の下に収められた諸字をみると校訂の対象となった驃はなく、校正字様のとおりになっている。もっとも、問題があったのは「湖北本」だけであったはずであるから、これが「湖北本」でないかぎり、当然のことながら、ここに驃があることはない。イをみると pèv の下に校正字様のとおり驃がある。

ところで、ここに一つ興味深い事実がある。「原本蒙古字韻」の所収字の供給源となった『新刊韻略』に校訂の対象である驃は収録されていない。この事実は、蒙古字韻の成立を考えるうえで重要なヒントを提供してくれる。そこでこのことに就き、これよりやや詳しく述べる。

まず現存する『倫敦抄本』に収録されている漢字にどのようなものがあるかということを確認するために、やや蛇足ながら、任意に一部分を取り出し必要な情報を加えて示すと次のようになる。なお、漢字に付された注釈は括弧を用いて(舟名)のように記す。

1 2 ×                    3 4 ⑤                    1 × ②                    1 2 ③  
 daŋ [平] 當 鎗 艦(舟名) 簞 檔 璫    [上] 黨 党 讜    [去] 讜 當 擋                    (上十四 a の 8 行目)

1,2,3 などの数字を振った漢字は『新刊韻略』(1229年)から採ったものである。×印を付した“艦(舟名)”と“党”は『新刊韻略』に未収録の字である。このうち前者のように注釈が付けられた字は『増修校正押韻積疑』(1264年)による増字・増注部分であり<sup>7</sup>、108個所ある。問題は後者の“党”字である。これが何に拠ったものか分からないが、寧忌浮 1997によるとこれに類する字の総数は86字にのぼるといふ。このように『倫敦抄本』の所収漢字は三つの層からなっている。第一層は『新刊韻略』から採られた部分、第二層は『新刊韻略』に収められておらず義注も付されていない部分(86字)、第三層は『増修校正押韻積疑』による増字・増注部分(108字)である。

上に挙げた三つの層のうち、第二層(86字)について、寧忌浮 1997は蒙古字韻の編纂者が増加したとする<sup>8</sup>。“蒙古字韻の編纂者が増加した”との表現は「原本蒙古字韻」の段階で既にあつたということと同義である。しかしながら寧忌浮 1997はその論拠を示さない。論拠は示されていないのであるが、いま校訂の対象として検討している“驃”が論拠となり得

<sup>7</sup> 義注が付された字は後の増補部分であり、この増字・増注は『増修校正押韻積疑』によるということについては吉池 1993による。

<sup>8</sup> “《蒙古字韻》收而《平水韻》不收的字，若“蓋”字之類，計有86字，現開列如下：……。以上86字，可能是《蒙古字韻》的編纂者增加的。”(163-164頁)。なお《平水韻》は『新刊韻略』のことである。

ると考える。寧忌浮 1997 の言うように、これが「原本蒙古字韻」までさかのぼり得るかどうかわからないが、すくなくとも朱宗文以前であることだけは確かである。その理屈は単純なものである。すなわち、朱宗文は 驃の訂正に言及している。校訂で言及されるということは、この字は、朱宗文が新たに増補したものでなければ朱宗文以降に増補されたものでもない。朱宗文以前に蒙古字韻に取り入れられていなければ、校訂において言及することはできない道理である。これが一点目。次は、驃は『新刊韻略』に未収であり義注も付されておらず先に述べた第二層(86 字)の中の一つと認められる。これが二点目。この二点より、驃を含む第二層(86 字)の諸字はほぼ同時期に蒙古字韻に取り込まれたと見なし得る。もっとも、このように言えるのは、第二層(86 字)の諸字が同質である、すなわち同時に付け加えられた場合である。このことを現段階で証することはできないけれども、反証が無い間は、作業仮説としてこのように想定しておきたい。

次に第三層の増字・増注部分であるが、寧忌浮 1997 はこれを朱宗文による部分であるとするがやはり論拠は示さない。この点について、吉池 2008 は朱宗文による増補とみることができる痕跡が僅かながらあるとした<sup>9</sup>。

#### 4. 二つ目の校訂

汝を ŋeu とするのは「湖北本」誤りであり正しくは日母に従う zeu である、ということについて。

訂正の対象となる本文を抜き出し、『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すと次のとおりである。

1 2 ③	①	①	1 2 3 ④	
ア ŋeu [平] 御 弼 拏	[上] 女	[去] 女	[入] 𪛗 𪛘 𪛙 𪛚	(上二十九 b の 9 行目)
6 魚/女余切	6 語/尼呂切	6 御/尼據切	1 屋/女六切	

<sup>9</sup> 校正字様の各本通誤という校訂箇所“編(搨は誤写)を mén とするのは誤りであり正しくは幫母に従う ben である”とある。当該の本文をみると、mén の下に編はなく、編は ben の下にある。これより、朱宗文の校訂の通りになっていることがわかるのであるが、ben の下にある編には『増修校正押韻積疑』による義注が付されている。校訂の対象となった字に義注が付されているという事実は、義注の付与の時期が朱宗文の校訂より後ではないことを示している。すなわち、義注付与の時期は、朱宗文による校訂と同時期であるかそれ以前ということになる。

さて、各本通誤にはその他にも興味深い校訂箇所がある。すなわち“痒を zeŋ とするのは誤りであり正しくは喻母に従う yaŋ である”というものである。『古今韻會舉要』をみると、八思巴字の zeŋ に相当する箇所にも、八思巴字の yaŋ に相当する箇所にも痒はない。したがって、『古今韻會舉要』のみによって蒙古字韻を校訂することは困難である。このように『古今韻會舉要』は校訂の参考とならない場合があるが、この箇所の校訂の参考となる韻書として『増修互注礼部韻略』、『附釋文互注礼部韻略』、『増修校正押韻積疑』を挙げることができる。いまひとつ、ここでは詳細は記さないが、『古今韻會舉要』では解決が難しく、『附釋文互注礼部韻略』もしくは『増修校正押韻積疑』で校訂し得るものがある。

以上、校訂の対象となる漢字に『増修校正押韻積疑』による義注が付されている点、校訂そのものを『増修校正押韻積疑』を用いて行った可能性がある点、この二点より次のように想定し得る。すなわち、『増修校正押韻積疑』による増字・増注の作業は朱宗文によって為されたものであり、朱宗文は校訂作業にあっても『古今韻會舉要』とともに『増修校正押韻積疑』も利用したというものである。このように想定するならば、諸事実を比較的無理なく理解できるように思うのである。

1 ② 1 2 3 4 5 ⑥ × 1 × ②  
 イ zeu [平] 如 茹 儒 濡 襦 孺 嚚 醜 [上] 女 汝(尔也) 𪛗(蜜餌) 茹  
 6 魚/人諸切 7 虞/人朱切 6 語/人渚切

① 1 ② ① ① 1 2 3 4 5 ⑥  
乳 [去] 洳 茹 孺 [入] 肉 辱 蓐 褥 鄔 縵 溲 (上三十一 a の 7-8 行目)  
 7 麌/而?切 6 御/人恕切 7 遇/而遇切 1 屋/如六切 2 沃[燭]而蜀切

まずは校正字様の検討の前に、イの“[上] 女 汝(尔也)”の義注“尔也”の位置が『倫敦抄本』では誤っており、本来ならば“[上] 女(尔也) 汝”でなければならないことを確認しておきたい。このことは「原本蒙古字韻」の所収字の供給源となった『新刊韻略』に日母の“女”字が無いことを根拠として忌 浮 1992 によって指摘された<sup>10</sup>。なお、増字・増注は『増修校正押韻積疑』によってなされたわけであるが、『増修校正押韻積疑』の当該個所をみると、“○汝(忍與切 水名釋亦爾也州名又姓) 𪛗(蜜餌) 女(通作汝 尔也)”とある<sup>11</sup>。これによれば、“𪛗(蜜餌)”と“女(通作汝 尔也)”を増字・増注したこと疑いないことであり、義注“尔也”は“汝”ではなく“女”に付されていたのである。

さて、「湖北本」では、“汝”が娘母の𪛗 ñ としてアの ñeu のもとに収められていたところ、『古今韻會舉要』の“○汝忍與切 半商徵音 𪛗 女 茹”によって日母の𪛗 ɛ であることを確認し、イの zeu の下に収めるべきであったものである。本文は校正字様の通りとなっている。もっとも「湖北本」以外の各本には問題は無かった個所である。

## 5. 三つ目の校訂

𪛗を h1em とするのは「湖北本」誤りであり正しくは溪母に従う k'(a)m である、ということについて。

先ず訂正の対象となる本文を抜き出し、『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すわけであるが、その前にパスパ文字 h1em について考えておかなければならないことがある。h1em という音節は『倫敦抄本』にない。あるいは「湖北本」のみに h1em という音節が登録されていたということはあったかもしれないが、誤写の可能性もないわけではない。『倫敦抄本』ではしばしば 𪛗 i は 𪛗 e で写されるから、ここでも i が e として写されたと思なし、h1em を h1i(a)m とするということも考えられる。h1i(a)m という音節は『倫敦抄本』に登録されているのでそれを示すと次のとおりである。

10 “上三十一 a7 上声第一、二字及其注文：“女。汝，尔也。”当寫作“女，尔也。汝。”“尔也”是“女”字之注文。《新刊韻略》人諸切小韻只收“汝、茹”二字，无“女”字。”(12頁)

11 文淵閣欽定四庫全書本『増修校正押韻積疑』では女の義注は“小也”となっているが、これは“尔也”の誤写に相違なく、ここでは訂正して提示した。

	1	2	3	④	①		①	1	2	3	④		1	②		
ア	h1i(a)m	[平]	咸	鹹	函	誠	銜	[上]	謙	檻	檻	濫	輓	[去]	陷	阜
	15	咸/胡讒切	15	咸[銜]戸監切	29	謙/下斬切	29	謙[檻]胡{黒奄}切	30	陷/戸?切						
															(下二十三bの7行目)	
	1	2	③		①		①	①	×							
イ	k'(a)m	[平]	龕	堪	戡	[上]	坎	[去]	勘	闕	瞰				(下二十bの10行目)	
	13	覃/口含切	27	感/苦感切	28	勘/苦紺	28	勘[闕]苦濫切								

アのh1i(a)mの下にも、イのk'(a)mの下にも、いずれにも“輶”という字はない。照那斯圖・楊耐思 1987 は輶を『古今韻會舉要』の上声 28 感敢韻の坎小韻に含まれる輶の誤写とする<sup>12</sup>。従うべきであろう。すなわち、「湖北本」では“輶”は、h1i(a)m(又はh1em)の下に収められていたところ、『古今韻會舉要』によって坎と同音であることを確認し、イのk'(a)mの下に収めるべきであったとしたものである。もっとも、なぜかイの個所に校訂の対象となったはずの輶がない。「朱宗文本」にあったものが、その後何らかの理由で欠落したと考えるしかないであろう。肝心の輶が『倫敦抄本』のどこにもないというのは困ったことであるが、この輶は、次に示すように、最初に検討した驃と同類であり、その点で興味深い。すなわち、輶は『新刊韻略』には収録されていない字なのである。次に義注が付されていたかどうかの問題となる。『倫敦抄本』に当該の文字が無いので直接確認することはできないが、『増修校正押韻積疑』を見ると輶は未収録である。『増修校正押韻積疑』に未収録であるからには義注の施しようもない。この字に義注は付いていなかったと断ずることができるのである。そうであるならば、輶は先に述べた驃と同様、第二層(86字)と同種の一字ということになり、朱宗文以前に蒙古字韻に取り込まれたということにもなる。

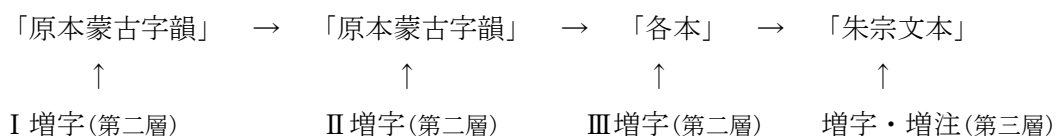
## 6.おわりに

『倫敦抄本』の所収漢字は三つの層からなっている。第一層は『新刊韻略』から採られた部分、第二層は『新刊韻略』に未収録で義注も付されていない部分(86字+輶)、第三層は『増修校正押韻積疑』による増字・増注部分(108字)である。

さて、朱宗文は「湖北本」の誤の訂正の中で“驃”と“輶”の訂正に言及した。校訂で言及されるということは、この二字は朱宗文が新たに増補したものでなければ朱宗文以降に増補されたものでもない。朱宗文以前に蒙古字韻に取り入れられていなければ、校訂において言及することはできない道理である。そしてこの二字は『新刊韻略』に収められておらず義注も付されていない第二層に属す字である。これより、第二層に属す“驃”と“輶”以外の諸字も(同質と見なしてよいならば)ほぼ同時期に蒙古字韻に取り込まれた、すなわち朱宗文以前に蒙古字韻に取り込まれたとすることができる。

<sup>12</sup> ““輶”不成字。《韻會》與之相当的溪母感類“坎”小韻有“輶”，注“輶輓，車行不平也，一日不得志。或作輓……亦通作坎珂”。字形相仿，可從。但本書韻內未收”(160頁)

次に問題となるのは取り込まれた時期である。第二層の諸字(同質と見なしておく)が朱宗文の校訂・増補以前に蒙古字韻に取り込まれていたということについては疑い得ない。その時期を、寧忌浮 1997 は「原本蒙古字韻」の段階で既に取り込まれていたとするわけであるが、それ以外の可能性も無いとは言い切れない。すなわち、「原本蒙古字韻」には無く、その後、朱宗文による校訂増補までの間に取り込まれたというものである。そこで、考え得る第二層(86字+輜。同質と見なしておく)の増補の時期を示すと以下の三つとなる。



I とするのは寧忌浮 1997 の見方である。これは「原本蒙古字韻」は成立の段階で既に第一層『新刊韻略』と第二層(86字+輜)から成っていたとする考えである。次のIIは、先ず第一層『新刊韻略』のみを材料とした「原本蒙古字韻」ができ、その後第二層(86字+輜)が増補され、それを基として各本(「湖北本」「浙江本」など)ができたとする考えである。最後のIIIは、各本(「湖北本」「浙江本」など)に分かれた後、それぞれに増補されていた諸字を、朱宗文が校訂・増補の段階で集めて「朱宗文本」とし、『増修校正押韻釈疑』による新たな増字(108字)についてはそれと区別するために一々義注を付したという考えである。現段階ではいずれにも軍配は挙げ難い。

#### <参考文献(発行年順)>

- 尾崎雄二郎 1962. 「大英博物館本蒙古字韻札記」, 『人文』 第 8 集, 162-180 頁。
- 照那斯圖・楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』 北京: 民族出版社。
- 花登正宏 1990. 「《蒙古字韻校本・校勘記》校補」, 『東北大学文学部研究年報』 第三十九号, (216)-(208) 頁。
- 寧忌浮 1992. 「《蒙古字韻》校勘補遺」, 『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』 1992 年第 3 期, 9-16 頁。
- 吉池孝一 1993. 「『蒙古字韻』の増補部分について」, 『語学研究』(拓殖大学語学研究所) 第 72 号, 17-31 頁。
- 中村雅之主編 1994. 『パスパ字漢語資料集覧』パスパ字研究会(富山大学人文学部中国語学研究室内)刊。
- 寧忌浮 1997. 『古今韻会挙要及相關韻書』 北京: 中華書局。
- 吉池孝一 2008a. 「蒙古字韻の校訂と増補について」, 『KOTONOHA』 第 70 号, 7-16 頁。
- 吉池孝一 2008b. 「蒙古字韻の補修について」, 『KOTONOHA』 第 71 号, 1-9 頁。
- 吉池孝一 2009a. 「蒙古字韻四庫採進本及び現存写本の書写時期」, 『KOTONOHA』 第 74 号, 41-43 頁。
- 吉池孝一 2009b. 「原本蒙古字韻考」, 『KOTONOHA』 第 81 号, 10-17 頁
- 吉池孝一 2009c. 「原本蒙古字韻の復元 一校正字様の各本重入漢字をめぐって(1)」, 『KOTONOHA』 第 85 号, 13-20 頁。
- 吉池孝一 2010. 「原本蒙古字韻の復元 一校正字様の各本重入漢字をめぐって(2)」, 『KOTONOHA』 第 86 号, 16-24 頁。